

群読の国語教育的意義

複数の読み手による朗読

「群読」を提唱した木下順二氏の言葉を借りれば、群読とは「複数の読み手による朗読」です。この定義の中には、2つの重要な鍵があります。一つは、群読があくまでも個による朗読を基盤にしたものであるということです。もう一つは、複数の読み手が必然的に求められる作品や箇所を複数で読むということです。

個による朗読の国語教育的意義

- ① 子どもたちが容易に作品世界にひたることができる。
- ② 黙読で得るよりも原初的で根元的な感動が得られる。
- ③ 内容理解だけでなく、叙述表現に対する目も開かれる。
- ④ 日本語のもつ美しい響きを感じ取ることができる。
- ⑤ 人の言にじっと耳を傾ける、聞く姿勢ができる。
- ⑥ 教師と子どもが一体化し、一つの世界を共有することができる。
- ⑦ 感動のある授業、楽しい授業をつくることができる。

『群読の授業』高橋俊三著 明治図書 1990

群読の3つの教育的効果

《学び合い》

群読をするためには、文脈をどこで読み分かつか、その部分を誰（と誰）が読み担うかを決めるための話し合いが必要となります。その決定は、作品の内容と文体の必然性によってなされることになります。そのため、その話し合いは、当然、作品（教材）解釈の紹介のし合い、説得のし合いとなります。子どもたちは、この話し合いをとおして、他者の読みに触れ、自身の読みを深めていきます。そこから、「学び合い」が生まれます。

《響き合い》

群読には、人を巻き込む力があります。学級を前にして、一人では朗読をすることができないような子どもが、グループの朗読では、予想以上に響く声を出しているということがあります。また、群読には、一人の朗読では発揮し得ない効果を醸し出すということがあります。声と声とが共鳴し合うのです。いずれも「響き合い」の効果です。

《聞き合い》

群読をするとき、子どもたちは、級友の声に耳を傾けます。真剣に聴きます。聞き入ります。演じ手同士がそうするだけではありません。他のグループの発表をも傾聴します。そこには、「聞き合い」の姿があります。